

十文字学園女子大学人間生活学部紀要第2巻 2004年

## 母親の子育て支援活動参加の実態と課題 — 三地域の実態比較を通して —

Present trends and problems of participation in  
childcare support for mothers

— Through a comparison of conditions in three differing regions —

関口はつ江

Hatsue SEKIGUCHI

赤井美智子

Michiko AKAI

### 要 約

本研究は現在我が国で行われている母親が参加するタイプの子育て支援活動の効果を明らかにすることを目的とした。地域的特性の異なる三市（大都市、関東地方の中都市、東北の中都市）の幼稚園保護者に対するアンケート調査を行い、990名の回答から、次の点を分析考察した。第一に子どもが幼稚園入園前の子育て支援活動への参加状態、不参加理由と支援ニーズ、現在の活動等と母親の年齢、職業、家族構成等との関連、第二に7種の支援活動の参加効果からの親の支援活動参加目的の分析、第三に活動参加時の親の悩みの内容分析による現在の支援方法の問題点の明確化。その結果参加の仕方、不参加理由、現在の社会活動等において親の生活状況、地域による差異が認められ、社会的背景によって支援活動の役割が異なることへの考慮が必要であることが指摘された。さらに、参加効果は共通的に子の充実（子どもが楽しそう）、社会との連携（自分と子どもの居場所）、多様性の受容からの自己受容（いろいろな人がいる）の3点を取り上げられた。今回は家庭保育を中心にしている幼稚園保護者が対象であることにもよるが、子育てが充実していることが最も重要なこととして位置付けていることが認められ、関連研究の結果とも一致した。参加における問題は人間関係形成上の悩みが多く、親世代の育ち方に密着した支援方法への改善が今後の課題であることが考察された。

---

十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科

Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Human Life, Jumonji University

キーワード：子育て支援、地域特性、活動種類、参加効果、参加時の困難

Key Words：Childcare support, Local characteristic, Types of activity, Effects of participation, Difficulties of participation

## Summary

This study is intended to demonstrate the effectiveness of family childcare support that involves mothers in Japan. A survey was conducted for preschool children guardians from 3 differing regions, (a big city and a medium size city in the Kanto area, and a medium size city in the Tohoku area) with 990 respondents answering to 3 subject areas. The first area included conditions of participation for child care support before the child entered a preschool, reasons of non-participation and family needs, as well as the relevance of present day activities, ages of mothers, occupations and family members. Secondly, an analysis of the purpose of mothers participating in support activities based on the effects of 7 types of activities was carried out. Thirdly, the problems that arose from participation concerns have been analyzed. Results show differences in attitudes to participation, reasons for non-participation, circumstances of parents involved in social activities and differing of regions. Results indicate that effects of childcare support vary due to differing backgrounds and more consideration should taken in these situations. In addition, effects of participation are reported through several common points such as child satisfaction, increased social connections and acceptance of oneself through acceptance of others. Because the survey was conducted for preschool guardians who spend a lot of time raising their children at home, many mothers seem to value childcare as important. This reaches an agreement with results of relevant studies. Improvement in childcare must be considered seriously in order to create a better child caring environment.

## はじめに

我が国は地域社会の崩壊、親世代の生き方の変化など、子育てのしにくい社会であることは歯止めのかからない出生率低下、子どもの虐待等に顕著にみられる育児不安に現われている。社会が子育てとどのように向き合うか、どのような手だてを講じるかは現在我が国の最大課題の一つとなっている。

これまで家庭教育支援、子育て支援活動は多様な形で実施されてきた。家庭学級など子育てのための知識伝達を目的とした活動は戦後の社会教育の一環として実施されてきたが、近年情報化社会を迎えてその意義は薄れてきており、他方、近年親が必要とするのは受け身の専門家からの学習活動ではなく、気軽に相談出来る相手や家庭外で子どもとともにいられる心地よい居場所や同質の仲間関係、自由な情報交換可能な場であるとされている(1, 2)。ここ10年間、参加者が主体的に参加し、参加者相互が自発的に人間関係を作り活動を自主的に展開することができるサークル活動、さらに一層開放的で出入り自由な形態の子育てサロン・子育て広場作りの活動へと展開している(3)。従来、地域社会が提供していた対等な人同士の緩やかなつながりの場所求められてきていることによる。一方で、それら地方自治体やNPOによる活動場所の他に、民間業者による様々な子どものための教室(スイミング、音楽、英語、体操その他)が子どもにとっても親にとっても友達作りやある種の居場所として、特に都市部に

において役割を果たしている。

しかし、出生率の低下傾向、虐待発生数増など子育て事情の改善の兆しが見えない現状にあって、さらに必要な手だてを模索する上で、現在の多様な社会の支援の場が実際にどのように活用されているのか、参加体験がどのような効果を持っているかについて検証が必要である。

## 研究目的

本研究は地域にある一般の支援活動全般への参加の程度、参加の直接的、間接的効果、それらの地域差を捉え、現在の子育てのための活動の場が果たしている役割を考察し、子育て状況を改善するために今後必要なことは何かを推測することを目的として行った。従来の研究の多くは特定の支援活動、特定地域の調査に基づいてその効果を測定している。しかし、地域の違いと多様な支援活動に対する参加実態を捉えることから現在の活動の特質を明らかにし、次への手だてへの示唆がえられるものと考えられる。

## 研究方法

調査対象者 大都市（東京・横浜）、関東地方の都市で子育てサロン活動が活発な都市（新座市）、全国第二位の出生率の福島県にある都市（郡山市）の幼稚園各3園合計9園の保護者1413名。本研究においては家庭保育を主にしている親に対する支援の課題を検討するために幼稚園園児の親を対象にした。

調査時期・方法 平成13年7月と9月に幼稚園を通して配布回収した。

調査内容 対象者特性（年齢、職業、家族構成、子どもの年齢）、子どもが入園前の子育て支援活動（講演・講座、子育てサークル、子育てサロン、勉強会、子ども劇場、民間の稽古ごと、イベント）への参加経験（3項目からの選択）、不参加の理由（3項目からの選択）、参加してよかったこと（13項目からの3項目まで選択）、現在の子育て活動、社会参加状態、参加に際して困ったこと等の自由記述、行政への希望等の自由記述、合計13項目である。なお民間業者による習い事は営利を目的としており、子育て支援を意図して行われているものではないが、子どものための教育活動の場所としての役割はもっているため加えて検討した。

## 研究結果

### I 調査の選択肢回答結果の分析

#### 1 全体傾向と地域的特徴

調査対象数と回収数は表1の通りである。

表1 回収率

	東京・横浜	新座	郡山	合計
配布状況	435	509	469	1413
回収状況	294	330	366	990
回収率	68%	65%	78%	70%

対象者の年齢、職業、家族構成、活動への参加状態、不参加理由、現在の活動状況の全体傾向を表2に示した。

表2 全体集計

		東京・横浜		新座		郡山		合計		
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	
あなたの年齢	1	20代前半	4	1.4	0	0	2	0.5	6	0.6
	2	20代後半	6	2	18	5.5	34	9.3	58	5.9
	3	30代前半	123	42	122	37.4	153	41.9	398	40.4
	4	30代後半	100	34.1	130	39.9	117	32.1	347	35.3
	5	40代前半	55	18.8	54	16.6	52	14.2	161	16.4
	6	40代後半	5	1.7	2	0.6	6	1.6	13	1.3
	7	50代以降	0	0	0	0	1	0.3	1	0.1
		計	293	100	326	100	365	99.9	984	100
あなたの働き方	1	専業主婦	248	85.2	246	75.5	212	58.9	706	72.3
	2	フルタイムの仕事	3	1	7	2.1	43	11.9	53	5.4
	3	パートタイム・アルバイト	23	7.9	41	12.6	72	20	136	13.9
	4	自営業	7	2.4	16	4.9	17	4.7	40	4.1
	5	自宅内アルバイト	8	2.7	14	4.3	10	2.8	32	3.3
	6	その他	2	0.7	2	0.6	6	1.7	10	1
		計	291	99.9	326	100	360	100	977	100
家族構成	1	2世代家族	247	87.6	252	83.4	245	70.8	744	80
	2	3世代家族	16	5.7	37	12.3	78	22.5	131	14.1
	3	その他	19	6.7	13	4.3	23	6.6	55	5.9
		計	282	100	302	100	346	99.9	930	100
子育て支援活動への参加経験の有無	a	参加したことがない	73	24.9	86	26.5	172	47.3	331	33.7
	b	少し参加した	162	55.3	179	55.1	147	40.4	488	49.7
	c	頻繁に参加した	58	19.8	60	18.5	45	12.4	163	16.6
		計	293	100	325	100.1	364	100.1	982	100
十分参加できなかった理由	あ	必要がなかった	49	25.3	42	20.7	83	29.5	174	25.7
	い	参加したい活動がなかった	48	24.7	47	23.2	54	19.2	149	22
	う	参加したかったができなかった	88	45.4	102	50.2	130	46.3	320	47.2
	え	その他	9	4.6	12	5.9	14	5	35	5.2
		計	194	100	203	100	281	100	678	100.1
上記のうちの理由	ア	情報がない	25	39.1	13	17.1	14	14.1	52	21.8
	イ	時間がない	15	23.4	18	23.7	46	46.5	79	33.1
	ウ	交通事情	1	1.6	13	17.1	8	8.1	22	9.2
	エ	家族の協力不足	1	1.6	3	3.9	3	3	7	2.9
	オ	一人で参加しにくい	9	14.1	18	23.7	14	14.1	41	17.2
	カ	その他	13	20.3	11	14.5	14	14.1	38	15.9
		計	64	100.1	76	100	99	99.9	239	100.1
	子育て関連の集団活動への参加	1	園の保護者会で役員等をしている	36	16.2	61	24.4	66	34.9	163
2		地域の子育て支援活動に参加している	25	11.3	36	14.4	30	15.9	91	13.8
3		地域の一般のボランティア活動に参加している	9	4.1	11	4.4	7	3.7	27	4.1
4		勉強会(サークル活動等)に参加している	18	8.1	27	10.8	25	13.2	70	10.6
5		民間が経営する習い事に参加している	134	60.4	115	46	61	32.3	310	46.9
		計	222	100.1	250	100	189	100	661	100.1

今回の対象は幼稚園児の家庭を対象にしたため、7割以上が専業主婦で、核家族が8割を占めるが、郡山の場合は専業主婦は6割でフルタイムとパート従事者が多い ( $\chi^2$ 乗(2)=#NUM!  $p<.01$ )。また3世帯家族が他地区より多く ( $\chi^2$ 乗(2)=#NUM!  $p<.01$ )、生活の状況の違いが調査結果における地域差の背景にあることが伺える。活動への参加状態に関して次のことが指摘出来る。東京・横浜と新座は類似の傾向を示しており、「参加経験なし」は4分の1であるが、郡山は半数近くが「参加経験なし」であり、関東圏と東北の地域差が見られる。 ( $\chi^2$ 乗(2)=#NUM!  $p<.01$ ) 不参加理由の「必要なし」のうち「参加したかったができなかった」ことの理由が、東京・横浜では40%近くが「情報がない」で、これは他地方の2倍以上である。 ( $\chi^2$ 乗(2)=15.60  $p<.01$ ) 中都市と大都市との地域のネットワークの違いが明らかである。また、「参加の必要なし」は傾向として郡山、東京・横浜、新座の順に多かった ( $\chi^2$ 乗(2)=4.86  $p<.089$ )。

このことが地域における母親がどのような関係や活動場所をもっているかの特性を表しており、意図的な子育て支援活動の場設定の必要性の高い地域的特性があることが推測される。このことは次の結果とも関連している。現在の活動状況の特徴は地方は保護者会活動などの定まった役割への参加傾向がある。 ( $\chi^2$ 乗(2)=19.23  $p<.01$ ) また、大都市は民間の稽古ごとが多く、経済的市場による活動が活発で、地方はより地域的活動が盛んであるという一般的傾向の現れが見られる。新座はその中間的な特徴を示している ( $\chi^2$ 乗(2)=#NUM!  $p<.01$ )

以下に親の諸特性と支援活動参加状況との関連を述べる。

## 2 参加状況、不参加理由と生活状況要因との関連

親の年齢と参加状況との関連を図1に示した。年齢と共に参加率が上がることが明らかである (親年齢20代、30代、40代、その他。  $\chi^2$ 乗(6)=16.728  $p<.01$ )。これは「参加したことがあるか」との問いであるため、子育て期間が長いと情報網も増え参加機会が多くなるので当然結果とも言えるが、不参加理由との関連を見ると若年層は「必要なし」の傾向が強い。若年の親の関心が子育て以外に向いているのか、同年齢同士適当な人間関係を持っているためか、さらに検討する必要がある。

親の働き方との関連は図2の通りである。専業主婦と自営業に参加率が高く、自宅で過ごす時間が多い層において必要性が高い ( $\chi^2$ 乗(18)=77.685  $p<.01$ )。

家族構成との関連を図3に、その地域別結果を図4に示した。2世帯家族(核家族)において参加率が高い ( $\chi^2$ 乗(9)=44.868  $p<.01$ ) ことは予想されたことであるが、その傾向には地域差が見られる。三世帯家族数が少ないが、大都市では三世帯の方が参加しやすい傾向伺える。これは三世帯の親が人間関係を作りやすく開かれた生活をしているのに対して、核家族の親がこもりがちになる問題がここでも現れていると考えることが出来る。では地方では三世帯家族は家庭、地域内で子育てが出来ているために必要がないと言えるのであろうか。不参加理由の世帯別の地域差をみると、図5に示すように、郡山では他地区と異なり「参加したかったができなかった」が三世帯に多い。地域によって人間関係に関する課題に違いがあり、子育て支援活動の場の作り方、情報の出し方において地域の実情にあった工夫が必要であることが明らかである。

不参加理由と生活状況要因との関連結果は表3に示した。

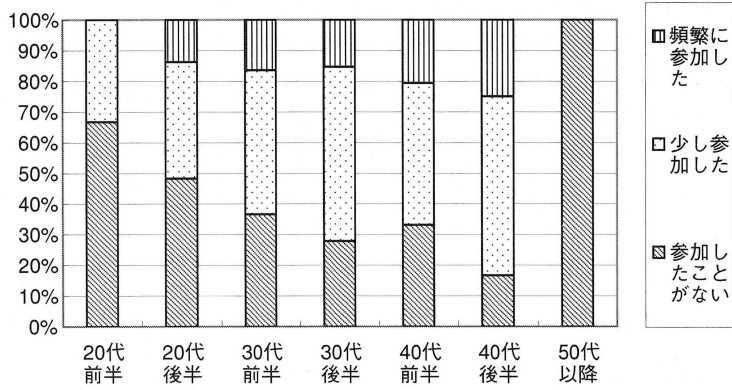


図1 参加状況 親の年齢別

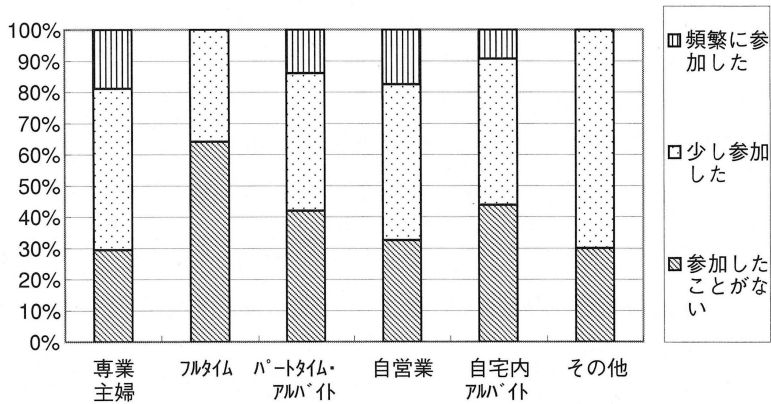


図2 参加状況 親の働き方別

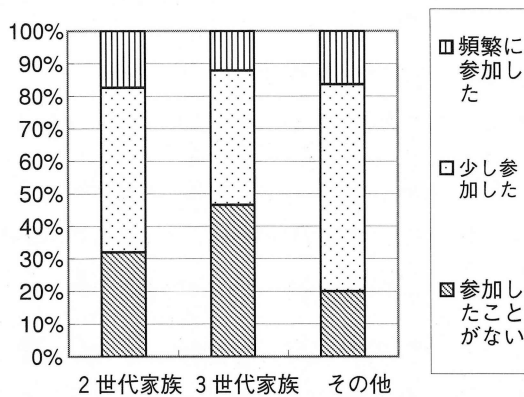


図3 参加状況 家族構成別

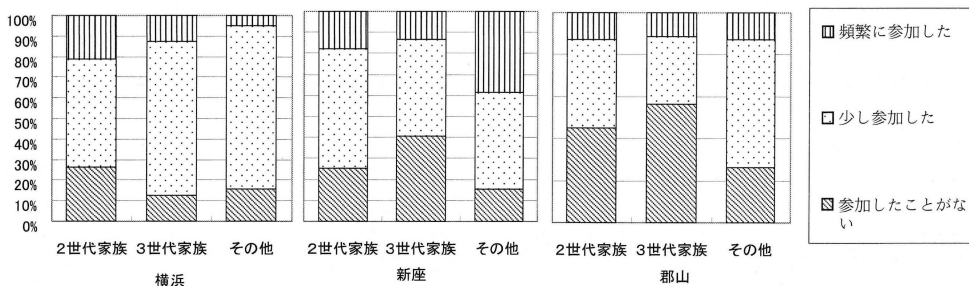


図4 参加状況 世帯別 地域別

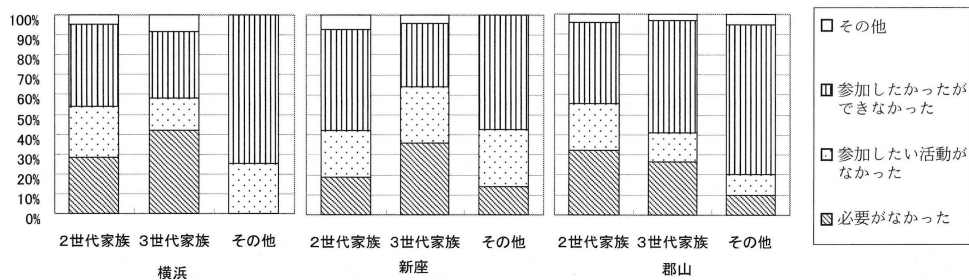


図5 不参加理由 世帯別 地域別

表3 不参加理由

表3-1 親の年齢別

年代	必要がなかった		参加したい活動がなかった		参加したかったができなかった		その他		合計
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数
20代前半	1	20.0	0	0.0	4	80.0	0	0.0	5
20代後半	16	33.3	10	20.8	16	33.3	6	12.5	48
30代前半	75	26.8	67	23.9	125	44.6	13	4.6	280
30代後半	60	25.8	51	21.9	112	48.1	10	4.3	233
40代前半	19	18.6	19	18.6	58	56.9	6	5.9	102
40代後半	1	16.7	0	0.0	5	83.3	0	0.0	6
50代以降	0	0.0	1	100.0	0	0.0	0	0.0	1
計	172	25.5	148	21.9	320	47.4	35	5.2	675

表 3-2 親の働き方別

働 き 方	必要がなかった		参加したい活動 がなかった		参加したかった ができなかった		その他		合計
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数
専業主婦	125	27.1	100	21.6	216	46.8	21	4.5	462
フルタイムの仕事	13	26.0	4	8.0	30	60.0	3	6.0	50
パートタイム・アルバイト	19	20.0	27	28.4	41	43.2	8	8.4	95
自営業	7	24.1	4	13.8	17	58.6	1	3.4	29
自宅内アルバイト	7	29.2	9	37.5	8	33.3	0	0.0	24
その他	3	33.3	2	22.2	4	44.4	0	0.0	9
計	174	26.0	146	21.8	316	47.2	33	4.9	669

表 3-3 家族構成別

家族構成	必要がなかった		参加したい活動 がなかった		参加したかった ができなかった		その他		合計
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数
2世代家族	132	26.7	120	24.2	217	43.8	26	5.3	495
3世代家族	30	30.6	18	18.4	46	46.9	4	4.1	98
その他	3	7.0	8	18.6	31	72.1	1	2.3	43
計	165	25.9	146	23.0	294	46.2	31	4.9	636

&lt;地域別&gt;

横浜	2世代家族	44	28.0	41	26.1	65	41.4	7	4.5	157
	3世代家族	5	41.7	2	16.7	4	33.3	1	8.3	12
	その他	0	0.0	4	25.0	12	75.0	0	0.0	16
	計	49	26.5	47	25.4	81	43.8	8	4.3	185
新座	2世代家族	29	18.8	36	23.4	78	50.6	11	7.1	154
	3世代家族	9	36.0	7	28.0	8	32.0	1	4.0	25
	その他	1	14.3	2	28.6	4	57.1	0	0.0	7
	計	39	21.0	45	24.2	90	48.4	12	6.5	186
郡山	2世代家族	59	32.1	43	23.4	74	40.2	8	4.3	184
	3世代家族	16	26.2	9	14.8	34	55.7	2	3.3	61
	その他	2	10.0	2	10.0	15	75.0	1	5.0	20
	計	77	29.1	54	20.4	123	46.4	11	4.2	265



### 3 参加してよかったこと

「参加してよかったこと」は7種の支援活動それぞれについて、表4に示された13項目から3項目を選択する方法で調べた。全体では「子どもの楽しそうな姿に安心した」が最も多く、次に「いろいろな人がいることがわかった」、「自分も子どもの居場所ができた」であった。講演・講座を除いていずれの活動においても「子どもが楽しそう」が最も良かったこととしてあげられていることは興味深い結果であった。子育てサークルや、サロンは母親自身のための場と考えられているが、そこでも先ず「子どもが楽しいこと」が高くなっていることから、母親にとっては自分がリラックスするのは「子どもが楽しい」ことを共有することが重要であることが明らかな結果であった。これは、まず母親にとっては子どもが充実できること（子どもの楽しみな姿）が親にとって最も重要であり、それを頂点にして、多様性の発見による自己受容（いろいろな人がいる）、地域とのつながり（居場所をもつ）が子育ての安定性を作る重要な要素であることが伺える。社会において母親へのサービスが注目されているが、今回の結果は子ども中心の母親意識が現れた。これは専業主婦層を主とした被験者の調査であることを考慮する必要があるが、現代の母親の一面を示していると言える。

この三要因をバランス良く満たしているのがサークルとサロンであり、講演・講座は「学習の場」として、子ども劇場、イベントは「子どもの楽しみの場」として、民間活動は「楽しさと居場所」としてと、それぞれの活動はその組み合わせによる役割の特性が異なるといえる。一般的には個々の親のニーズによる選択可能な状態が望ましいといえよう。

表4 参加してよかったこと

項目	講座	サークル	サロン	勉強会	子ども劇場	民間	イベント	その他	全体
子どもの成長の見通しをもてるようになった	31 (13.8)	43 (5.8)	14 (5.0)	15 (6.0)	12 (9.0)	67 (11.8)	21 (5.5)	4 (3.9)	207 (7.7)
自分の子どもについてあまり気に病まなくなった	24 (10.7)	32 (4.3)	16 (5.7)	11 (4.4)	5 (3.8)	24 (4.2)	8 (2.1)	5 (4.9)	125 (4.7)
子育ての方法について教えて貰えた	38 (16.9)	47 (6.4)	22 (7.9)	18 (7.1)	4 (3.0)	19 (3.3)	6 (1.6)	4 (3.9)	158 (5.9)
子どもの楽しそうな姿に安心した	22 (9.8)	171 (23.1)	66 (23.6)	96 (38.1)	66 (49.6)	183 (32.2)	165 (43.2)	26 (25.2)	795 (29.6)
いろいろな人がいることがわかった	33 (14.7)	146 (19.8)	54 (19.3)	41 (16.3)	16 (12.0)	77 (13.6)	59 (15.4)	18 (17.5)	444 (16.6)
一人で悩まなくてよかった	10 (4.4)	44 (6.0)	18 (6.4)	7 (2.8)	4 (3.0)	14 (2.5)	11 (2.9)	4 (3.9)	112 (4.2)
ゆとりを持って子どもを見るようになった	16 (7.1)	25 (3.4)	11 (3.9)	9 (3.6)	4 (3.0)	27 (4.8)	12 (3.1)	4 (3.9)	108 (4.0)
他の人から学んだ	17 (7.6)	48 (6.5)	20 (7.1)	17 (6.7)	8 (6.0)	29 (5.1)	15 (3.9)	9 (8.7)	163 (6.1)
自分の子どもも居場所ができた(友達ができた)	18 (8.0)	155 (21.0)	49 (17.5)	28 (11.1)	10 (7.5)	102 (18.0)	55 (14.4)	20 (19.4)	437 (16.3)
家事にゆとりをもてるようになった	0 (0.0)	1 (0.1)	1 (0.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (0.4)	0 (0.0)	2 (1.9)	6 (0.2)
自分が発揮できるようになった	2 (0.9)	10 (1.4)	4 (1.4)	4 (1.6)	1 (0.8)	7 (1.2)	12 (3.1)	3 (2.9)	43 (1.6)
家族関係がよくなった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (1.3)	0 (0.0)	6 (0.2)
他人の意見が気にならなくなった	5 (2.2)	4 (0.5)	1 (0.4)	1 (0.4)	0 (0.0)	2 (0.4)	2 (0.5)	0 (0.0)	15 (0.6)
その他	9 (4.0)	13 (1.8)	4 (1.4)	4 (1.6)	3 (2.3)	15 (2.6)	11 (2.9)	4 (3.9)	63 (2.3)
回答数合計	225(100.0)	739(100.0)	280(100.0)	252(100.0)	133(100.0)	568(100.0)	382(100.0)	103(100.0)	2682(100.0)

注) 括弧内は割合

#### 4 活動種別参加経験、現在の活動の地域差

生活状況の異なる地域において上記の各種活動への参加状態にどのような違いがあるかを表5に示した。ここから、参加の仕方にはかなりの地域差があることが明らかである。東京・横浜では民間活動への参加が最も多く、サークル、イベントへの参加率も高い。新座も同傾向であるがサロン、講演・講座への参加率が他地区より高いことが特徴で、多様な活動への参加が特徴である。従来の地域の連帯が希薄になり、新たな関係形成の必要性が強い地域的特性の現れが見られる。郡山はサークルとイベントが多く、民間活動とサロンが他地区より特に少ないことが特徴である。ここで民間活動やサロンへの参加率の低さは場がないことと関連するが、これは地域的なニーズの有無を反映すると考えられる。(地域差はイベントを除いてどの種類についても $\chi^2$ 乗検定で.01以下の危険率で有意差が認められた)

表5 子育て支援参加経験者数(参加率%)

	横浜東京	(割合)	新座	(割合)	郡山	(割合)	合計	(割合)
総数	294		330		366		990	
講演、講座	39	13.3	55	16.7	37	10.1	131	13.2
サークル	132	33.5	126	38.1	98	26.8	356	36
サロン広場	41	13.9	66	20	36	9.8	143	14.4
勉強会	57	19.4	63	19.1	58	15.8	178	18
子ども劇場	20	6.8	35	10.6	45	12.3	100	10.1
イベント	86	29.3	84	25.5	93	25.4	263	26.6
民間稽古	125	42.5	135	40.9	58	15.8	310	31.3

#### 5 活動参加経験と現在の社会的活動(保護者会役員を例として)

親の社会参加と子育て支援活動参加の関係を見るために保護者会役員の経験と支援活動参加経験との関連を調べた。一般的結果を図6に、地域別を図7に示した。全体では役員をしている人は役員をしていない人よりも活動参加傾向がある(参加なしと頻繁・少し経験の比較 $\chi^2$ 乗(1)=6.936  $p < .01$ )。子どもが幼稚園入園前に母親が家庭外の集団体験をすることが将来も社会参加のための基盤作りになっているかどうかは今後検討課題である。しかし、これの地域差をみると東京・横浜、新座と郡山とでは明らかに異なる傾向があり、郡山では役員でありながら参加経験なしの比率が高い。 $(\chi^2$ 乗(2)=16.05  $p < .01$ )

すなわち、関東圏においては保護者会役員のような社会的参加は種々の支援活動参加の延長線上にあると見られるが、地方である郡山の場合、支援活動が地域生活の中に十分位置付いていない、または、地域内の人間関係が希薄な一部の人のニーズに対応している、あるいは保護者会活動の性質が異なっているなどのことが考えられるが、支援活動役割の地域による違いを表している例といえる。

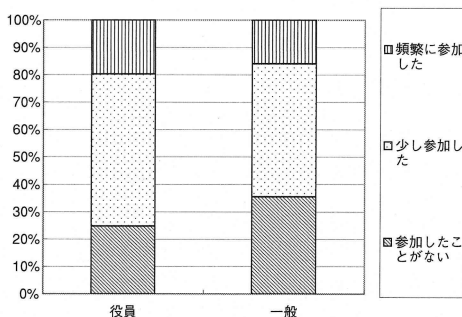


図6 参加状況 役員か否か

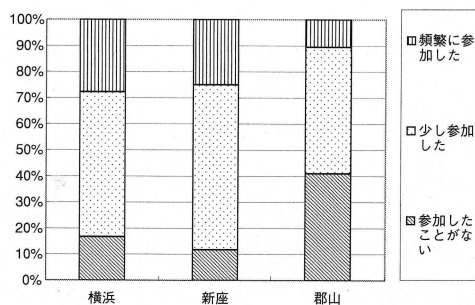


図7 保護者会役員の参加状況 地域別

### 6 現在の社会的活動と参加経験の種類との関連

現在の活動状況は民間活動は約3分の1が行っているが、子育て支援9%、ボランティア約3%と活動率は低い。以前の参加経験との関連を見ると、民間活動以外は特に関連は認められない。(表6、表7)

表6 現在の活動状況 (活動率%)

	横浜東京	(割合)	新座	(割合)	郡山	(割合)	合計	(割合)
総数	294		330		366		990	
子育て支援	25	8.5	36	10.1	30	8.2	91	9.2
ボランティア	9	3.1	11	3.3	7	1.9	27	2.7
勉強会	18	6.1	27	8.2	25	6.8	70	7
民間稽古	134	45.6	115	47	61	16.7	310	31.3

表7 支援活動参加経験とその後の活動 (活動率%)

活動種類	参加経験	保護者会役員(163)		ボランティア(118)		民間稽古(380)	
		人数	(割合)	人数	(割合)	人数	(割合)
講演講座	あり	32	20	33	28	84	22.1
	なし	131	79.8	85	72	296	77.9
サロン等6種	あり	222	22.7	199	28.1	608	26.7
	なし	756	77.3	509	72	1672	73.3
民間稽古	あり	64	39.3	56	47.5	215	56.6
	なし	99	60.7	62	52.5	165	43.4

現在の子育て支援活動が子育ての一時期の居場所となっているが、その体験が親自身を育てる機能までは果たしていないとみることもできよう。民間稽古が継続されていることは、この場が特に大都市では親の子育て情報や関係をつくる役割が大きとともに、自分都合で選択しやすいことなどのことであろう。

## 考 察

以上の結果は関連研究の結果とほぼ一致している、

神田ら（4）は愛知県の子育て支援センターへの参加度12%、認知度約14%と低く、不参加理由の7割が情報不足によること、八重樫ら（5）は岡山、島根県の調査でサークル参加率35%に止まっていること、さらに近所つきあいが頻繁、家族友人が相談相手であることが子育て不安の低さと関連し、子育てサークル参加状況と子育て不安との関連はなかったと報告しており、現時点では支援活動は個人的関係の補助的役割にあることを示唆している。また、柿崎（6）は自主センター活動における調査において、本研究結果同様、子どもが満足して遊ぶ時に親同士もリラックスして会話が交わせ、充実感を感じるとの結果を得ている。

子育て支援活動の果たしている役割に地域による差異あり、地域別の支援方法の検討が必要であることが指摘できる。例えば地方では三世帯家族では「参加したいが出られない」ことが多いなど既存の関係、他地域からの移住した人のニーズとの調和など大都市とは異なる課題がある。その地域住人の働き方、経済活動、人間関係のスタイル、地域の諸機関ネットワークなど固有の地域の暮らし方の中で子育て支援のどのような場が役に立つかの掘り下げが必要である。

都市化現象が進み、固定的な人間関係からの解放や母親自身の自己実現への要求が強い現代社会において、新しい子育て支援のための環境作りが必要であると考えられている。しかし、親中心に傾きつつある支援方法から、親子のつながりを支援する面への一考が求められる。すなわち「子育てからの充実」「社会参加（社会との連帯）からの充実」「自己発揮による充実」の三者のバランスがとれるように、しかもその比重が異なる個人的ニーズに対応することがこれからの課題であろう。都市部の現象が基準になって「これからの時代はこうあるべき」との形を作り、地方が同じ方法で後追いすることでは真の解決にはならないといえよう。

## II. 自由記述部分（子育て支援活動への参加時に、困ったこと、悩んだこと）についての考察

この自由記述欄に記述した人数は216人であった。この数字からは、アンケートへの回答者990人の中で何らかの子育て支援活動への参加経験ありと回答した人々の（327人、全体の約33%）66%が記述したことになり、参加者の半数以上の人々が、困ったこと、悩んだことがあったことが明らかになった。

自由記述の内容は、以下のような枠組みにおいて4つに分類した。

### 1. 参加会場へ、親子で出かける過程について

- ・会場までの距離が遠いと、便利な交通手段を利用できない場合は、子どもを連れての移動が大変だった。（雨の日は、狭い駐車場が満杯になり自動車利用が困難になり、自転車走行やベビーバギー利用時の危険も増すため）
- ・歩道がないような道路やでこぼこ道、歩きながらの喫煙者が多い地域では、幼児や乳児たちを連れての外出において危険を感じるがあった。

（二人の子どもを連れての参加には、天候や道路事情、移動手段の条件が整わないと参加

意欲がそがれがちになった。)

## 2. 活動への子どもの参加状況について

- ・慣れない場所での、初めての人ばかりの集団への参加が難しく、親から離れて遊ぶことや集団と一緒に活動することができない、楽しめない状態が続いて困った。
- ・子どものために参加したのだが、子どもが参加をいやがるので悩みましたが、今思うと、2歳児の時の集団参加は早すぎたのだと思う。
- ・子どもが、他の子どもへ乱暴したり、騒いだりして困った。
- ・年下の乳児と共に参加すると年上の子への充分なかかわりをしてあげられないので、年上の子が十分に親子での活動を楽しめないままになった。

## 3. 活動における親同士の人間関係について

- ・全く一人で、初めての人ばかりがいる集団へ参加することには大きな不安やとまどい、孤独感が伴った。
- ・集団活動へ途中から参加するようになって、前から参加している仲良し同士の固まりや派閥があり、そこへ新しく入っていくことは難しかった。
- ・うわべだけのつきあいだけで終わり、仲良しはつくれなかった。
- ・サークルなどで知り合った同士で親しくなったら、全員そろって同じようにべったりしたおつきあいをしなければならぬのが苦痛だったり、全員そろっての外出が増え、家事がおろそかになり困った。
- ・参加者における年齢差、価値観、しつけ等の違いが大きいことが気になったが、それは意見がまとまらない原因になっていた。
- ・親によってしつけの内容や方法が違うので、親同士で気まずくなるのを恐れて、自分の子ども以外の子どもへのしかり方、親同士のかかわり方に気を遣い使い、迷うことがあった。
- ・いろいろな親と子どもたちに触れて、自分の子どもと比較してしまい、かえって自分の子どもの育ちへの不安を持ってしまった。
- ・勝手な親や協力する姿勢のない親が多かったりすると、なかなか意見がまとまらずに困った。

## 4. 活動の枠組みについて

- ・固定して使用できる会場がなかった、会場が狭すぎたり、風邪をひいている子どもが参加していたりして、活動のために必要な基本的な環境基盤やルールが整っていない状況で親子で不快になることがあった。
- ・親たちが集まってサークルなどを立ち上げる時には、行政からのサポートがあったが、その後は全く親たちによる自主的な運営を期待されサポートがないので、サークルを運営するリーダー役にとってはとまどうことが多く、大変だった。
- ・自主性を発揮して活動の企画を実行することや、意見のまとめ方に苦労が重なると、我が子の子育てにそのしわ寄せがきてしまった。(ボランティアのサポートがある時は、有り難

かった)

- ・活動の内容において、イベントや手づくりへのこだわりが増えると、手間をかける事柄に追われて忙しくなり、活動へ参加すること自体が負担になってくるがあった。

以上のような4つの種類に分けられた、各内容の概要についての考察を述べる。

1. およそ40～50年前ごろの日本の子育て状況においては、近隣の公園や空き地、安全な道ばたや店先、庭先の空間で何組かの親子が出会い、子育て中の親同士や子どもたちがごく自然に、知り合える場が成立していた。そのような場では、わざわざ公民館や集会所に出かけていかなくとも、近隣の子どもたちは同年齢や異年齢の子供と遊び、子どもを遊ばせながら親たちは交流や相談事を日常的に展開できたのである。今はそのような体験を得るためには、意図的に設定された遠くの場所へ親子で出かけて行かなければならず、乗り物の置き場や移動方法への心配が常に伴うものである。何らかの集団活動に参加するためには、会場へ親子で到着するまでの移動に伴う困難をクリアしなければならないのである。

今回のアンケート調査の項目のなかで、「子育て支援活動へ充分に参加できなかった」と回答した回答者に対して、その理由を記述してもらったところ、以下のような理由が示された。

- ①時間がない (33%)
- ②情報がない (22%)
- ③一人で参加しにくい (17%)
- ④交通事情 (9%)
- ⑤その他

ここからも、都市化、少子化が進む現代では、一割近くの回答者にとって、会場へ到着するまでの交通事情が、参加を阻む要因になっていることが明らかになった。

2. 親子が集う集団活動に参加してみて、子どもの集団へのかかわり方についての困りごとや悩みごとを、記述者205名（お稽古ごとの集団についての記述は除く）の中の51名（25%）が書いている。

その内容の多くは、子どもが人見知りをしたり、親から離れたがらない、集団で一緒に活動することを楽しまない、乱暴やけんかで周囲に迷惑をかける等の新しい集団に接してみると、子どもの対人、対集団関係に関するものであった。

記述者のなかには、過去の親子での参加体験を振り返って、「今から思うと子どもを集団へ参加させたのが2歳では早すぎたのだと思う」とか、「子どものためにと考えて、親子で参加したが、子どもに無理をさせてしまった」と子どもの側への配慮が少なかったことの気づきも書き加えている人が数名いた。

これらの記述からは、現代の子育て中の親が、見知った人の少ない親子たちが、十名以上集うような集団の場に接したら、幼い子どもはびっくりしたり、不安になったり、興奮したり

することを自然なこととらえたり、幼い個々の子どもの集団へのかかわり方の違いがあってあたりまえとらえる子育て上の常識を、青少年期に自然に体験して学ぶ機会に恵まれなくなった世代であることが分かる。

また、少子化と近隣での人間関係が希薄化している今日では、幼い子どもが、近隣の親子と出会い、公園で一緒に遊んだり、お互いの家を訪問したりするような機会に恵まれることなく、狭い人間関係体験の中で暮らすことが増えているために、初めての大きな集団にいきなり参加した時には、そこでの活動を楽しめるようになるには、十分な時間と大人の援助を必要とすることは当然であろう。

### 3. 参加時の親同士の人間関係についての記述は、2の次に多く記述されていた。

今回の自由記述欄にはどのような種類の子育て支援活動に参加した時の人間関係体験における困ったこと、悩んだことなのかを、明示していないものが多かったが、先に述べた親同士の人間関係における困ったこと、悩んだことの内容のまとめは、サークルに限らずいろいろな親子が複数参加する集団活動において共通に成立している困ったことや悩んだことであると把握できよう。(明示してある記述の中では、サークルにおける体験としての記述が最も多かった。28人)

今回の「困ったこと、悩んだこと」の調査結果は、他地区の調査研究結果と共通しており、現代の若い乳幼児を育てている親たちの半数以上の人々が、親子で参加できる活動を求めつつ、一人で参加することの不安やなかなかとけ込めない孤独感、人間関係の難しさに直面し、困ったり悩んだりした経験があることが分かった。

2でも述べたことであるが、現代の子育て中の親世代は、自分が育てられている時代に、近隣や家族関係の中での多様な生活体験から、人間関係や子育てについての実践的な学びを身につけることが難しくなった社会状況において育った世代である。いじめによる自殺が珍しくなくなった時代に育った親にとっては、対人関係に過敏になり、初めての集団に参加することに不安を感じ、子どものけんかへのかかわり方について親同士で話し合うことの一つ一つに神経を使うことが多く、おおらかに親同士の出会いと交流を楽しむところまで、対人関係を深めることは容易なことではないことが推察される。

しかし、記述者の中には5、6名ほどではあるが、「はじめは知っている人もなく不安であったが…」とか「はじめは、じぶんの発言内容に悩んだりしたが、…一年もたつと悩まなくなった」などというように、参加初期に成立した困ったことや悩みが参加を継続していく過程で無くなった」ことを記していた。

子育て支援は親と子どもの関係が豊かに発展することを目指した支援であり、親や子どもの人と関わり合い、人と共に育ち合う力を伸ばすことが目指されている。ここに明らかになったような子育て中の親の困ったことや悩みの実態を把握したうえでの、親の変化発展する可能性を十分に伸ばせるような子育て支援活動の展開が必要である。

### 4. 主として、サークルについての記述に多かった内容として、「自主的に運営・企画することにおけるリーダーのとまどいや負担の重さ」についての困ったことと悩みが目立ってとら

えられた。同時に、立ち上げ時のみではない行政のサポートの継続やボランティアの参加への切実な要望が併記されていることにも注目したい。

そもそも、サークル(=子育てサークル)とは、1980年代ごろから、地縁血縁による子育て支援のネットワークが消滅した地域の子育て中の親たちによってつくられ始めた子育て仲間による自主グループを出発点としている。「自分たちの子育ての悩みを解決したり、支援し合ったり、親子で楽しんだりしながら親子共に成長しよう」というような目的をもつこのような自主グループは子育てサークルと呼ばれ、全国にさまざまな異なる特色をもつサークルが新たに生まれたり、変化したり、消えたりしながら2000年代になっても各地でその活動は継続されている。

このような歴史を有するサークルは、草の根の市民による自発的で、自主的な特色ある企画や運営が自由に展開することが期待され、行政はサークルの設立時への援助はするが、の後の運営にはタッチしない姿勢のところが多い。しかし、今回の調査からは、子育て中のリーダーの負担が大きくなりすぎて、サークルが行き詰まることの無いようにする行政からのきめの細かい援助やボランティアによるサポートが必要とされていることが把握できた。

## 考 察

子育て支援活動に関する今回の調査研究結果から得られた人間関係を中心とする困ったことや悩みの多さからは、「子育て中の親の、新しい人との出会いや交流、さまざまな違いを受容しながら、粘り強く関わり合い、育ち合うような人とかかわる力を伸ばすには、どのような活動が必要か」という課題が新たに成立してきた。現在、子育て中の若い親世代の人々の多くが、子どもの時代に近隣との人間関係が薄い地域の核家族で育ち、学校ではいじめ問題が常に存在しているような時代において人とのかかわり方を身につけてきた世代であることを考えると、子育て支援の各種の集団活動への参加者を増やし、その活動が参加者である親子にとって充実して心地よく育ち合える活動の場となるようにし、そこでの人間関係体験の学びが家庭や近隣、他の集団活動において広がることを目指されるであろう。

## まとめ

今回の調査を通して、子育て支援活動は親世代の生活の変化と共に進化し続けなければならないことが捉えられた。既存の活動の一つ一つの特徴はその参加者の状態によって長所にも短所にもなり得る。設置されたものが適切に機能するとは限らないのは、主催者や利用者の問題ではなくそれが必要性とマッチしているかどうかの検討がなされなければならない。現在子育て中の親世代の多くは子ども時代に人間関係が薄い核家族で育ち、いじめが日常的にあるような学校生活経験があり、さらに自己の意識が強いことを踏まえた、集団参加が親子にとって充実し心地よいものであり、そこに主体的に参加して成長できるような場の設定と運営が今後検討されなければならないであろう。



## 参考文献

- 1 柏木恵子 森下久美子編著 『子育て広場0123 吉祥寺』 ミネルヴァ書房 1997
- 2 垣内国光・櫻谷真理子 『子育て支援の現在』 ミネルヴァ書房 2002
- 3 坂本順子、赤井美智子 「育児期にある親の学びの場の創造—地域子育てネットワークによるワークショップ開発」『人間生活学部紀要』 第1巻 pp1~25 2003
- 4 神田直子他 「子育てネットワークづくりに関する研究(8)」『日本保育学会55回大会発表論文集』 2002
- 5 八重樫牧子他 「母親の子育て不安に関する研究」『日本保育学会第54回大会発表論文集』 2001
- 6 柿崎典子 「自主育児グループの活動を通して」『日本保育学会55回大会発表論文集』 2002
- 7 神田直子、山本理絵 「乳幼児をもつ親の地域子育て支援センター事業に対する意識に関する研究—子育て支援事業参加者と非参加者の比較から—」『保育学研究第』 39巻第2号 pp80~87
- 8 太田光洋 「『子育て支援』とは何か」『保育の実践と研究』 Vol.6 No.4 pp10~19 2002
- 9 丹羽洋子 「母親たちにとっての『子育て支援』『発達』」 84 pp38~39 2000
- 10 赤井美智子 『地域における子育てネットワークの創造』 泉工房 2001

## 付 記

本研究は人間生活学部共同研究費補助による研究です。また、統計的検討は幼児教育学科長田瑞恵講師にご協力を頂きました。